



収穫期を迎えた「愛知梨3号」

早生で良食味のナシ新品種「愛知梨3号」を開発

本県のナシ産地は「幸水」を旧盆前に出荷し、以降、「豊水」「新高」等の出荷が続きます。しかし、近年、主要品種の一つである「豊水」については、酸味に対する嗜好性が薄れ、消費が減退傾向にあります。こうした状況を踏まえ、農業総合試験場では、「幸水」との作期分散が可能で、早生の良食味品種「愛知梨3号」を開発しました。

本品種は、樹勢が強く、苗木の新梢伸

長も旺盛なため、早期の樹冠拡大が可能です。また、花芽が着生しやすいため、栽培が容易な品種です。果汁の糖度は、「幸水」「豊水」に比べ高く、糖類の中でも甘みを感じやすいとされるショ糖と果糖の割合が高くなっています。さらに「豊水」に比べ酸味が少ないため、現在の消費者嗜好に合っており、「幸水」以降に出荷されるナシの消費拡大が期待されます。
(園芸研究部)

本品種は国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構と共同開発し、2019年10月1日付けで、「瑞月」(ずいげつ)の名称で品種登録出願が公表されました。



頭上散水によるキクの高温対策技術を開発

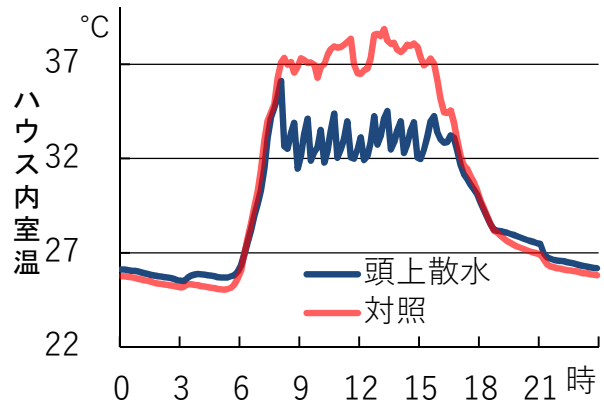


頭上かん水装置

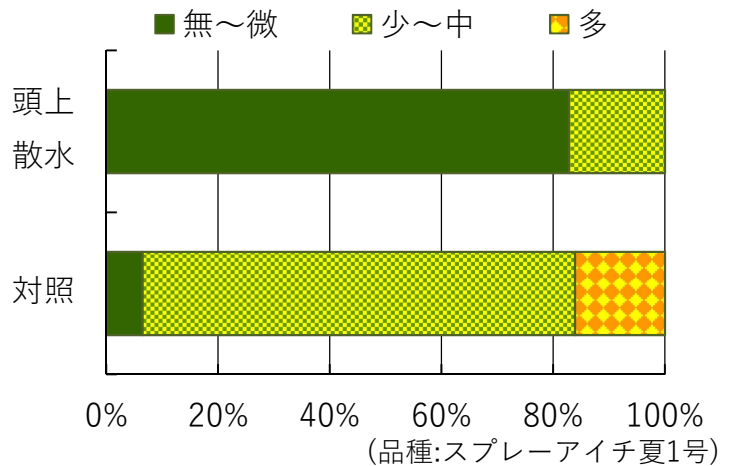


頭上散水による生育の違い

(左：対照、右：頭上散水 品種：精の一世)



頭上散水によるハウス内の室温変化
(2015年7月21日～8月21日の平均)



頭上散水による黄斑点症状の抑制効果

夏季のキク施設栽培では、高温により開花遅延や生育不良、生理障害などが発生し、安定生産の妨げとなります。

そこで、キク栽培ハウスで導入が進んでいる「頭上かん水装置」を活用し、日中に少量・多頻度で散水し、気化冷却を利用する高温対策技術の開発に取り組みました。

夏季日中の 8～15時の間に、40分毎に30秒～1分間散水を行ったところ、散水を行っていないハウスと比べて、室温が約3～5℃低下し冷却効果が認められまし

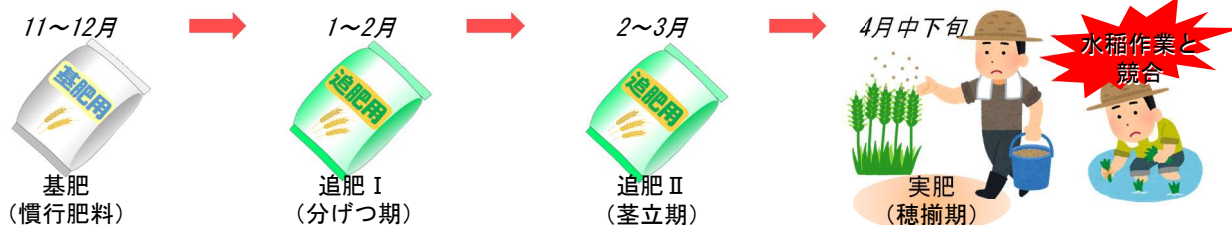
た。その結果、草丈が伸び、切り花全重も増加するとともに、開花遅延を軽減する効果も確認されました。

また、スプレーギクでは高温により葉に黄色い斑点が発生する生理障害がでることがありますが、頭上散水により黄斑点の発生が大幅に抑制されました。

このように、既設の頭上かん水装置を利用することで、新たな投資を行うことなく夏季のキク生産性向上を図ることができます。

(東三河農業研究所)

パン用小麦品種「ゆめあかり」の省力施肥技術を開発



実肥相当分の窒素肥効を有する被覆尿素を基肥肥料に配合

「ゆめあかり専用肥料」で実肥を省略できる施肥体系を開発

基肥：16kg
(ゆめあかり専用肥料)

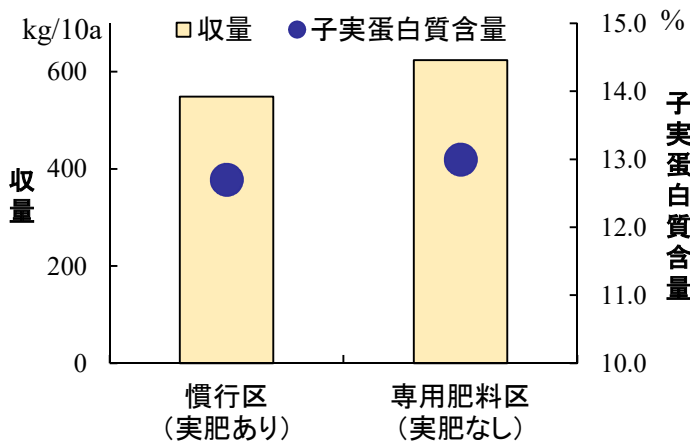
追肥Ⅰ：4kg
(分けつ期)

追肥Ⅱ：4kg
(茎立期)

実肥不要！
実肥 (穂揃期)

※施肥量は10aあたり窒素成分量

ゆめあかり専用肥料による穂揃期追肥(実肥)を省略した施肥体系



「ゆめあかり専用肥料」を用いた施肥体系と慣行栽培の比較
(現地試験結果の平均、2017年産)

「ゆめあかり」の生育状況とシンボルマーク

本場が開発した硬質小麦品種「ゆめあかり」は、パンや中華めん用の小麦として、現在作付が広がっています。

硬質小麦では実需者が求める高い子実蛋白質含量(品質目標：12.5~14.0%)を確保するため、4月中下旬頃の穂揃期の追肥(実肥)が必要です。しかし、追肥時期が水稲栽培の春作業と重なり生産者の大きな負担となっていました。

そこで、実肥を省略するため、実肥相当分の窒素成分が穂揃期に溶出する「ゆめあかり専用肥料」を開発しました。

本肥料を基肥として16kg/10a(窒素成分)施用し、分けつ期と茎立期にそれぞれ4kg/10aの追肥を行うことで、実肥を施用しなくても慣行と同等以上の高い収量と子実蛋白質含量を確保する施肥体系を確立しました。

(作物研究部)

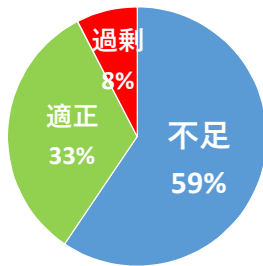
本研究は、愛知県経済農業協同組合連合会との共同研究で実施しました。

研究トピックス

アブラナ科野菜の ホウ素施用技術開発に着手

愛知県のアブラナ科野菜栽培ほ場の土壌中ホウ素含量を調査した結果（2016～17年）、約60%のほ場で県の土壌診断基準値（0.5～1 ppm）以下でした。土壌中ホウ素含量が少ないほ場ではホウ素欠乏症の発生が懸念されます。このため、不足するホウ素を補うようホウ素肥料の種類、施用量の検討など技術開発の取り組みを開始しました。

（東三河農業研究所）



アブラナ科野菜栽培ほ場の
土壌中ホウ素含量別割合



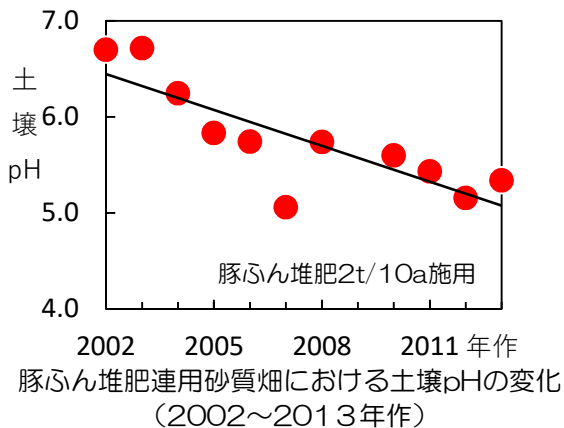
ブロッコリーの
ホウ素欠乏症

本研究は愛知県経済農業協同組合連合会との共同研究で実施しています。

砂質畑への過剰施肥は窒素溶脱量を 増やし土壌pHを低下させる

窒素肥効が高い豚ふん堆肥を連用した砂質畑において、施肥基準量の化学肥料を施肥すると、窒素の溶脱量が増えました。さらに、窒素の溶脱に伴って塩基類の溶脱量も増えるため土壌pHが低下しました。これらのことから、豚ふん堆肥を砂質畑に施用した場合は、窒素減肥やアルカリ資材の施用が必要です。

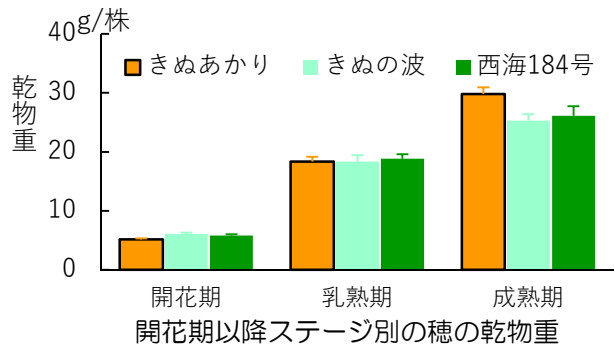
（環境基盤研究部）



豚ふん堆肥連用砂質畑における土壌pHの変化
(2002～2013年作)

小麦品種「きぬあかり」の多収要因の解析

本場が開発した小麦品種「きぬあかり」の多収要因を、乾物生産の観点から交配親である「きぬの波」「西海184号」と比較検討しました。その結果、「きぬあかり」は子実生産効率が高く、成熟後半まで高い乾物生産能力を有していることで、千粒重が重くなり多収になると考えられました。（作物研究部）



たまり醤油絞り粕を利用した 低水分の堆肥生産と堆肥の敷料利用

牛床の敷料として一般的に使われるオガクズの不足により、堆肥の敷料利用が試みられていますが、乳牛ふん堆肥は水分が多く敷料に適しません。そこで、油脂を多く含むたまり粕を添加したところ、堆肥発酵が促進され、蒸発量が増えることにより、低水分の堆肥を作ることができました。牛の行動や牛体の汚れはオガクズと同程度で、問題なく代替可能であることが確認できました。（畜産研究部）



研究短報 第125号

編集・発行 愛知県農業総合試験場

〒480-1193 愛知県長久手市岩作三ヶ峯1-1

TEL 0561-62-0085 内線322 (企画普及部)

FAX 0561-63-0815

<http://www.pref.aichi.jp/nososi/>